

ニューズレター第九号

ドイツ現代史研究会ニューズレター第9号（2008年1月）

内容

- ・ 佐久間大介君が研究者として歩んだ道（大津留厚）
- ・ 坂昌樹さんのこと（丸島宏太）
- ・ 「2007年度ドイツ現代史学会」参加報告（村上宏昭）
- ・ 会員の近著から（2007年9月～2008年1月）

佐久間大介君が研究者として歩んだ道 （大津留厚 神戸大学教員）

佐久間大介君は、自分の研究テーマに対して粘り強く知識を深めながら問題意識を研ぎ澄まし、そこから新たな発想を得ていく、そういうタイプの研究者でした。最初にお会いした時、佐久間君は京都大学文学部の学生でした。その後、京都大学大学院修士課程に進み、博士課程に進学し、さらにインスブルック大学に留学するという過程で徐々に力をつけていきました。その成長振りには目を見張るものがあり、特に留学から帰国して病の床に就くまでの半年間の研究者としての活躍は鬼気迫るものがありました。

佐久間君の研究テーマは近世ティロールの愛郷主義にありました。ティロールは14世紀以来ハプスブルク家を君主とするいわゆるハプスブルク帝国を形成する一領邦でありました。ティロールは18世紀末から19世紀初めのナポレオン戦争期にフランス軍の侵攻を受け、バイエルン王国の支配下に置かれることとなります。それに対する抵抗がティロールの名を高からしめることとなりますが、佐久間君はこの抵抗の論理を、Vaterland、Patriot、Nation という三つの概念を用いて、当時の領邦議会の議事録などを詳細に分析して考察しました。そしてこの場合のVaterlandは、あくまでもティロールを意味し、これに対する義務を果たす者がPatriot、そして、ティロールの国制を担う諸身分がNationと理解されていたことを明らかにしました。したがって、もしハプスブルク家の側がティロールの伝

統的な自治権を蔑ろにするような行為に出るとすれば、それに対してもティロールは抵抗を試みることになります。

その背景には、1713年のプラグマーティシェ・ザクツィオン以来「オーストリア君主国」としての一体性を追求する中央権力と領邦としてのティロールとの緊張関係がありました。ティロールは君主国としての一体性を前提としつつも、ティロールの自由と特権は侵すことのできないものであるという立場でした。その緊張関係の文脈の中で初めて、「祖国」、「愛邦主義」、「ナチオン」は意味を持つてくることになります。Vaterland、Patriot、Nation という私たちにとって理解することが非常に困難な概念を読み解く方法を「ティロール対オーストリア君主国」という歴史的な文脈の中に発見したところに「佐久間史学」の独自性がありました。その成果が『東欧史研究』第29号に寄せた論文「18世紀のティロールにおける「愛邦主義」的言説」でした。ここでは、「オーストリア君主国」の集権化に抗して形成されたティロール諸身分の抵抗の論理が考察されました。

しかしこの意味でのティロールの愛邦主義は、近代に近づくにつれて大きな矛盾に遭遇することになりました。それは、一方でこの場合の Nation、すなわち国制を担う諸身分に含まれない人びとをどう位置づけるか、という問題であり、もう一つが、Nation の新たな解釈、特に中央ヨーロッパで説得力を持ってきた言語による Nation 理解が持つティロールにとっての危険性でした。イタリア語を話す人たちとドイツ語を話す人たちから成立するティロールは分裂の危機を孕むことになります。実際第一次世界大戦が終わった時、ティロールはドイツ系地域とイタリア系地域に二分され、今日に至っています。その間、第二次世界大戦時にはイタリアに編入された地域のドイツ系住民がドイツ国籍を求めて移住したり、第二次世界大戦後にはドイツ系住民が自治権を求めてテロに訴えたりするもありました。その過程ではティロールという概念それ自体もその意味するところが問われることにもなりました。

インスブルック大学留学中にティロールの「郷土誌」に注目した佐久間君はその検討を通じて、「ティロールという矛盾」への答えも用意していました。その序論に相当するのが「近世ティロールの「地域」・「境界」認識と領邦誌」（『史林』90-3）でした。17世紀に成立し、18世紀後半に隆盛を見た領邦誌は、初期啓蒙思想の所産といえます。佐久間君はその担い手であったドイツ語系エリートの「ティロール」の地域・境界概念を分析し、外部とティロールを分ける「境界」もティロールの内部における「境界」も揺れ動いていたことを明らかにしました。例えば、1760年に出された『ティロール伯領誌』に初めてドイツ語系住民とイタリア語系住民を区別する記述が現れることを明らかにしています。

21世紀に入って、19世紀的な民族の概念や、近代国家の概念が揺らいでいます。そのためヨーロッパでは近代の前史としてではない、近世史研究が隆盛を見えています。ティロー

ルは正にその二つの概念によって、独自の Nation 概念が否定され、ティロールの Nation なるものは潜在化せざるを得ませんでした。現在、多文化社会を目指す EU の中で、国家や民族に収斂しない地域の独自性（固有の多文化性）と自立性が注目され、ティロールの経験も焦点の一つになっています。20 世紀のイタリア系とドイツ系の対立の時代を経て、今では一つの論文をイタリア語、ドイツ語両語で表記する歴史雑誌も刊行されるにいたっています。

ティロールの愛郷主義に対してしっかりした批判の精神を持ちながら、ティロールに対する深い学識を有した佐久間君が目指した研究は、日本のみならず国際的なヨーロッパ近世史研究の中でむしろこれから大きな重みを持つてくるのではないのでしょうか。31 歳の誕生日の翌日に、私たちに大きな課題を残して足早に旅立った佐久間大介君に心からの哀悼の意を表したいと思います。

坂昌樹さんのこと 丸島宏太（姫路獨協大学教員）

私がドイツ留学の旅に出たのは 1988 年 8 月のこと、それまでドイツはおろか、たかが観光目的でも海外に出たことのない私にとって、期待よりはむしろ不安の先行する旅立ちであった。そこでいざというときの頼りを求めて、ある知人をつうじて最初の留学先であるフライブルク在住の日本人を紹介してもらったのだが、その方と現地ではじめて会った折に一緒に現れたのが、坂昌樹さんであった。聞くところによると、19 世紀前半期のドイツ初期自由主義運動のリーダーであるカール・フォン・ロテックの思想を研究しておられるという。そのころ私は国民国家の黎明期である 19 世紀初頭、世論が軍隊をどう見ていたのかを調べていたことから、当時の進歩的知識人のオピニオン・リーダーと言うべきこのロテックに行き当たっていた。だからロテックや彼の周辺事情に詳しい坂さんは、私には願ってもない相談相手となった。いや、私にとっては初期自由主義の思想なんかには詳しい日本人がいること自体、驚きであった。そのころ私は院生の身ではあったが、近代ドイツ史の研究に携わる日本人にどのような方がいるかはだいたいわかっているつもりであった。だが恥ずかししながら、それまでの私のネットワークには坂さんはまったく引っかかっていなかったのである。

坂さんは名古屋大学経済学部のご出身で、水田洋先生の下で社会思想史を専攻しておられた。ドイツ留学に旅立たれたのが 1980 年代初頭、そのままドイツで博士論文をものにしようと長期滞在しておられた。今日でこそドイツで博士論文を書こうという若手も少なく

ないが、当時は歴史学の分野でドイツで学位を取ろうとの意欲をもった人はきわめて希であったと思う。そんな坂さんから伺う話は、専門分野が思想史であったことと、対象とする時代が19世紀前半期であったせいもあろうが、そのころわが国の主流であった「特有の道」論や近代化論に立脚した議論とはまたひと味違った趣があり、まだ駆け出しの身であった私には、本国ドイツの学問世界の奥深さをひしひし感じさせるものがあった。

残念ながら、諸般の事情で博士論文の完成にいたらずに帰国を余儀なくされた坂さんであるが、それから数年して桃山学院大学に奉職することとなった。その後、帰国して非常勤の職すらなかった私に桃山での非常勤の口を紹介してくれたのも、坂さんであった。その教暦が後に私が専任の職を得る出発点になったことを思うにつけ、坂さんから受けた恩の有り難さを思わずにはいられない。

19世紀前半期の自由主義思想で接点をもっていた私と坂さんであるが、その後私は19世紀後半から20世紀へと関心が移動したのにたいし、坂さんの関心は18世紀、17世紀と過去の方向に向かったため、研究者としてのおつきあいは久しく疎遠になっていた。彼の学問上の主戦場は啓蒙の時代とその前史であった。だから私には坂さんの業績について語ることは難しいし、その資格もないであろう。ただ、やはり啓蒙の時代を専門とする早稲田大学の弓削尚子さんが、ご自身の西洋史学会での報告にあたってわざわざ司会を坂さんに頼んだことから、彼が専門を同じくする研究者から一目置かれていたことは推測できる。またドイツ現代史研究会例会では、西村稔さん（現京都大学教員）の著書『文士と官僚』の書評を引き受けられ、学識の深さに加えて、彼独特の軽妙洒脱な語り口で見事にその内容を紹介し、コメントを加えられたことが思い出される。

坂さんがしばらくご自身の研究に打ち込めなくなったのは、ひとつには大学での業務に忙殺されたせいである。勤務校で海外交流制度の拡充に大いに貢献された坂さんは、昨年4月から1年間の予定でようやくサヴァティカルの権利を得、研究に没頭しはじめた。6月の新潟での西洋史学会では、フライブルク時代の旧友である松本彰さんらも交えて、久々にみんなで騒ごうと計画していた。奇しくも、坂さんの息子さんは新潟大学の学生となっていた。久々の再会をみんな楽しみにしていた。その矢先の訃報であった。坂さんが帰国後、名古屋で家族ぐるみで親しくしておられた愛知教育大学の近藤潤三さんは、私が電話で訃報を伝えると、一言こうおっしゃられた。「寂しい」。

私もまったく同感である。

「2007 年度ドイツ現代史学会」参加報告

(村上宏昭 関西大学大学院)

2007 年 9 月 22-23 日にかけて、東海大学湘南キャンパスで「ドイツ現代史学会」が開催された。昨今の日本では、ひと昔前に比べてもドイツ離れが加速化しており、第二外国語としてドイツ語を教える大学も、その数を急速に減らしつつある。かつて日本の教養人の多くが「デル・デス・デム・デン」を学び、ドイツ語こそ教養の代名詞であったかのように思われた時代を振り返ってみると、今さらながら隔世の感があるが（もっとも、それもせいぜい 1970 年代くらいまでだろうか）、このようなご時世にあっては、こうした学会が今年度も無事開催されたこと自体、喜ばしいと思わなければならないのかもしれない。とはいえ、やはりこう言わざるをえないところに若干の寂しさを感じるのは、何も私だけではないだろう。

さて、今年度の学会は私にとって二つの点で強い印象を残すものとなった。第一に、報告予定者の一人であった京都大学の佐久間大介氏が、学会直前の 2007 年 8 月に、不治の病のため弱冠 31 歳で他界されたことだ。ご存知の方も多いただろうが、氏はオーストリアとイタリアにまたがるティロール地方の（とくに 18 世紀後半から 19 世紀初頭の）歴史を専門に研究され、2006 年に二年間のオーストリア留学を終えたばかりだった。既に博士論文の執筆に取り掛かっていたと聞かすが、将来有望な研究者だっただけに、志なかばで病に倒れなければならなかった氏の無念を考えると、同じ研究者の端くれとして胸を締めつけられる思いがする。

かく言う私も、生前の佐久間氏と懇意の仲だったというわけではないが、氏が留学する直前には、私自身ドイツ留学を控えていたこともあって（佐久間氏は 2004 年の夏に、私は半年遅れで離日した）、ドイツ現代史研究会で休憩の合間に少しだけ向うの事情について語り合ったことがある。お互い喫煙者（という社会的マイノリティ）だったこともあり、休憩中に喫煙所で鉢合わせることも珍しくなかったのだ。その際、日本で進めてきた研究テーマが底を尽きて、「向うで新しいネタを探さないといけないなあ」というようなことを口走った記憶がある。結局、それが佐久間氏との最後の会話になってしまったが。このたびの学会でもやはり、最初に氏の冥福を祈って黙祷が捧げられた。

第二に私の印象に残ったのは、今回採用されたテーマである。これは私だけでなく、多くの研究者の方々も同様だったのではなかろうか。今回のテーマは、第一日目が「戦後日本におけるドイツ社会主義運動史研究の総括と展望」、第二日目は「地方史 Landesgeschichte の射程」である。周知のように、近年は移民史研究を始めマイノリティ研究が盛んに行われており、それだけに第二日目のテーマはきわめてアクチュアルなもの

で、川口智江、西山暁義、谷口健治の三氏による報告も、フロアの方は高い興味関心をもって参加されたことと思われる。

その一方で、第一日目のテーマ「社会主義運動史」は、ソ連崩壊から既に16年が過ぎた現在としては、一見するとアクチュアリティに欠ける、あるいは「時代遅れ」だという印象を与えかねないものであった。むろん私個人の意見としては、後述の理由で、この種のテーマを「何を今さら」とあたまから退けることには躊躇を覚えるが、フロア（とりわけ年配の先生方）からの声には、やはり戸惑いというか、一種の拒絶反応に似たぎこちなさを感じられた。実際それらは異口同音に、「どうして現代の日本で、今さらこうしたテーマを取り上げるのか」と疑問を呈する声であった。

だが実際に垂水節子、山井敏章、星乃治彦の三氏による報告の内容を聞いてみると、「時代遅れ」どころか、現在に至るまでの非常に多種多様な研究状況を、各人の手法で見事に整理されており、私のような若輩者には聞くだけでただ圧倒されるものばかりだった。私なりに（勝手に）まとめさせていただくと、まず垂水氏の報告「SPD史から社会運動・社会史研究へ（私的省察）」では、1960年前後の社会民主党史の研究が、戦後日本におけるドイツ社会主義運動史の起点にあるとされ、60年代末から80年代にかけての社会運動史を経て、80年代半ば以降における社会史研究との合流に至るまでを、それぞれの時代背景を視野に入れつつ論じられていた。山井氏の報告「1848/49年革命と社会主義」は、容易に要約しがたいが、革命の担い手に対する視点の変容と、ブルジョア革命論から近代管理社会創出の契機としての革命という、革命像そのものの変遷、社会主義・共産主義・社会民主主義という、それぞれ互いに重なり合いつつも相異なる概念の起点の再考、そして、いわゆる「アソシエーション社会主義」の思想と実験の歴史を論じ、最後に革命史研究の帰結として、逆説的にも「革命」自体への関心が希薄化してしまったと結論づけ、ドイツ近現代史研究にとって「社会主義」が持つ意味を、私たちに考えさせるきっかけを与えてくれた。

最後に星乃氏の報告「一人称でみるヴァイマル共和国期労働運動史研究」は、論題どおり「ポスト団塊世代」としての氏の個人的経験と、『史学雑誌』の「回顧と展望」から戦後日本の労働運動史研究を振り返る。林健太郎の「転向」問題を反省にして、研究者としての「あり方」、「良心」にこだわりつつ、生産から消費へと視点が移動している現在の研究の現状に対して、「果たして労働の問題は解決したのか？」と警鐘を鳴らす一方、ローザ・ルクセンブルク研究の再燃のきざしに「新たな希望」を見る氏の議論は、その主観的でありながら徹底して首尾一貫した視点＝確固たる思想から生み出されているだけに、「社会主義運動史」というテーマそのものを越えて、改めて私たちに歴史研究者としてのあり方を問いかけているように思われた。

とはいえ、先ほど述べたように、フロアとしてはやはりテーマの有効性自体に疑問が残

っており、今回の学会ではこの点で報告者とフロアの溝が最後まで埋まらなかったように見える。これは、こうしたテーマの選択について、学会側からの説明が事前に何もなされなかったことに起因しているのかもしれない。それゆえこのテーマが選ばれた経緯については、私にはよく分からないが、ただ個人的には、今日の日本でこの種のテーマが論じられること自体に意味がないとは到底思えない。

私は、この社会主義・労働運動史というものがドイツ近代史研究、つまり帝政期からナチズム期を対象とした研究の主流において、完全に終息した（ように見えた）後で歴史研究の世界に入った世代である。私がこの領域に興味を持ち始めたときは、（個人的な印象では）既に戦後の社会主義・労働運動史研究とは一線を画す形で「近代の病理」が叫ばれ、「管理社会」ないし「社会国家」の問題が流行していた時期であった。それゆえ今回の報告のように、それらの潮流をも「社会主義運動史研究」の一環として組み込むことには多少の違和感を覚えたものの、だからといってそれを「時代遅れ」であるとか、ときおり言われたように、「私自身はこの潮流には与しなかった」という類の議論も、私のような世代には、ただひたすら自分との温度差を感じさせるものでしかなかった。

だが、私にとって戦後の社会主義運動史研究の意義というのは、他でもなく今日の視点から「歴史的に」再考するということにある。つまり、まさに「一人称」として、今現在の私たちの営みを省みるためにも、「あれは一体何だったのか」と、このかつての一大研究潮流を歴史的に分析する作業というのが、望ましいどころか不可欠でさえあると思われるのだ。今回の学会が、そうした再考のきっかけとなれば幸いなのだが。

会員の近著から（2007年9月～2008年1月）

- ・小野清美「ワイマル共和国研究あるいは学問的議論の深化のために——田村・星乃編『ヴァイマル共和国の光芒』の幾つかの章によせて——」、大阪外国語大学ドイツ語研究室編『SPRACHE UND KULTUR』40（2007年9月）
- ・佐藤温子「脱原子力政策をめぐる政治過程——ドイツ・ゴアレーベン核廃棄物最終処分場問題における緑の党の役割を中心に——」『国際公共政策研究』第12巻第1号（2007年9月）、189-206頁。
- ・村上宏昭「『世代』概念をめぐる一考察—世代史研究の拡張へ向けて—」『歴史家協会年報』第3号（2007年12月）、53-68頁。
- ・望田幸男「ドイツから「日本の道」を考える」共著『国際平和と「日本の道」』昭和堂（2007年10月）

- 望田幸男監訳、D. J. ゴールドハーゲン『普通のドイツ人とホロコースト』ミネルヴァ書房（2007年11月）